

与那覇勢頭豊見親の出自を考える

～「与那覇勢頭」は倭寇由来の名称か～

下地 利幸（宮古郷土史研究会）

はじめに

与那覇勢頭豊見親は洪武 23 (1390) 年、白川浜から船出して中山王察度に初めて朝貢し、宮古の主長に任じられた人物として知られている。しかしその中山朝貢以外に人物や事蹟等を伝える記録は全く伝わっていない。白川氏家譜は「元祖与那覇勢頭豊見親恵源、童名真佐久、生卒伝わらず、あるいは曰く天人の子なりと、然れども世遠くして、その実否未詳。父母不詳。室は久栄免嘉、姓名、生卒ともに不詳」と記録している。白川氏は「恵」の字をもって名乗頭字とする、このことについて同家譜は、その序で「白川をもって氏となすは、始祖恵源公が白川にあって禎祥を得て中山に通じるをもって氏となす。また、恵源にあって始めて貢船を造り、以って貢典の道を開いた故をもって恵を名乗り頭字とする」と記している。

「与那覇勢頭豊見親のニーリ」（盛加越与那覇）が多良間島に残されている、この「ニーリ」について稲村賢敷は、与那覇勢頭豊見親の生い立ちや人物、事蹟等を詳しく伝えるもので、「これによって、目黒盛戦争の当時における与那覇勢頭豊見親の姿とその後の彼の心境変化を窺知することができる。」（『宮古島庶民史』）と述べてその詳細な解釈を行っている。その中で稲村は、与那覇勢頭豊見親は与那覇原一党を率いる佐多大人とは親と子の関係だったとみられると言って、その与那覇原一党は「当時東支那海を寇掠した倭寇の一味」だと指摘している。

本稿では、この稲村説等を踏まえながら、旧記類や家譜、ニーリ等の記録をみていくことで、与那覇勢頭と倭寇、与那覇ばら軍（いふさ）、中山朝貢、八重山とのかかわりなどについて考えてみることにする。

1 与那覇勢頭豊見親の出自

「世遠くしてその実否詳^{つまび}らかならず」と記録される与那覇勢頭豊見親の出自について旧記類は、中山朝貢以後の動向も含めてみるべきものを伝えていない。「与那覇ばら」については『宮古島記事仕次』（1748 年、以下『記事仕次』）が、「目黒盛豊見親与那覇はらと軍の事」、「高腰の按司与那覇はら軍に不ろふされし事」の二つを記して、「その頃は兵を好んで戦伐止む時なし、もし戦い負くるときは、その村を焼き払い男女一人も残さず屠殺し、その田畑を奪取する世俗なり。ここに平良より東に与那覇はらとて一間切あり、その主は作多お不ひとと云者なり、此の郡に兵十行あり、一津らとは百人をいふ、この十津らの兵共驍勇にして至

極無道なり、常に諸村を攻落すを業として厭う事なし。昔は西の百郡、東の百郡とて村々お不かりしを、与那覇はらの兵共に過半不ろふされたり。」とその威勢を伝えている。

『宮古史傳』（慶世村恒任、1927年、以下『史伝』）は「武威をふるって各地を攻略し一統の業を立てんとした与那覇原の佐多大人^{さたうぢひと}は、今一步と云ふ所で、目黒盛のために一敗地に塗れてしまった。（中略）戦敗の恨みを呑んで四散した与那覇原の人々の中に、真佐久^{まさはく}といふ一少年があったが少数の邑人等と共に夜に紛れて北へ走り、漸く北海岸白川浜の付近に行つてささやかな邑を建ててそこに住んだ。」、そこが今の与那覇間の地で、真佐久（与那覇勢頭）はそこで久栄免嘉^{ひさえみけ}という女を娶り、一族のために再挙の道を講じ、やがて時を得て、白川浜から船出して中山朝貢の道を開き、察度王から宮古島の主長に任じられたと云つて、与那覇勢頭豊見親は佐多大人を主長とする与那覇原の一族だと叙述している。

『宮古島庶民史』（稲村賢敷、1972年、以下『庶民史』）も、「目黒盛戦争で瀕死の重傷を負い」ながら、ようやく一命を取り止めた与那覇勢頭豊見親は「後に一族のものを率いて与那浜の荘園に落ち行き、密かに再興の機会を待つことにした」と云つて、「与那覇勢頭豊見親のに一りという神歌よると『盛川越与那覇よ、与那覇勢頭豊見親よ』と歌い出しているから、彼は与那覇原がなお平良の東川根盛川越に拠っていたころ、その最盛期に生まれたものであろう。（中略）佐多大人と与那覇勢頭豊見親の関係は、父子か或いは血族関係」であつて、「佐多大人なき後の与那覇原一族の中心は、自然に与那覇勢頭豊見親に帰したことからすれば、むしろ親と子としてみるのが穏当」であろうと述べている。

与那覇原と目黒盛の一戦当時の与那覇勢頭について、慶世村は「真佐久という一少年」、稲村は、ニーリなどの解釈から「二十歳に達した若武者で、・・・既に与那覇勢頭豊見親と称していた」とする違いはあるが、ともに与那覇勢頭は佐多大人率いる与那覇原の一族だと言っている。（但し、慶世村には倭寇についての言及は一切みられない。）

このことについて砂川明芳は『宮古島郷土史考』（第5部、1989年、以下『郷土史考』）で、与那覇勢頭は与那覇原の一統ではないとする立場から「この中（与那覇勢頭豊見親のニーリ）からは、与那覇原の一若大将として戦闘（目黒盛との戦い）に参加したということは伺えない。敵によってやられたのではなく、むしろ身近な競争相手によって殺されたことを叙述しているのである。」と言つて稲村の説に異をとなえている。与那覇勢頭を与那覇原の一族とするみかたは、慶世村が唱え、稲村がそのことを「与那覇勢頭豊見親のニーリ」で実証して示すことでほぼ定説化されている。その稲村の云う、「与那覇勢頭豊見親のニーリ」をどう読み解くか、砂川明芳はまさにそのことの意味合いを問いかけているように思われる。

2 与那覇勢頭豊見親のニーリ

ここでは稲村の『宮古島旧記並史歌集解』（1977年、以下『史歌集解』）に採録する「与那覇勢頭豊見親のニーリ」の全節を取りあげて見ていくことにする。（但し、下段の解釈については要点のみを略記し、一部は「庶民史」の語釈も（）で入れた。）

与那覇勢頭豊見親のニーリ

- 1 むいか^{くす}越^な与那覇^よよ 「むいか^{くす}越」は地名で平良市東仲宗根にある「むいか井」の付近をいう。豊見親はここで生まれた。
- 2 与那覇^{みやこ}しど豊見親よ 宮古の始まり即ち島の新しく立った頃の意、
- 3 島ぬ^{あらだつ}新立んゆ 島ぬ新立んゆ
- 3 とゆむしゆが、にやーんにば 「とゆむしゆ」「なといしゆ」は対句で名高いすぐれた人の意、（名高い人が居なかった）
- 4 名といしゆが、にやーんにば
- 4 じゃらばん、とゆみみ 「じゃらばん」はそれじゃ、私がという意、
- 5 じゃらばん、名とりみ （では俺がその名高い人になろう）
- 5 いでとゆみうたすが 出世して名高い豊見親といわれて居たが
- 6 出で名取りうたすが
- 6 しゃなんすが、うぷさん 「しゃなん」は猜む又は羨む意、「うぷさん、たい
- 7 憎むすがたいさん さん」は沢山居ったの意、
- 7 しゃなんすん、しゃなまり 猜む者憎む者たちに憎まれて、（憎む者のために陥
- 8 憎んすゆん憎まり れられて）
- 8 にいら島、^うりていゆ 後生即ち死人の住む所へ下りて云った（にいら島、
- 9 あろう島下りていゆ あらう島は後生のこと）
- 9 にいら^{てだ}天太う前ん 「てだ」は其処の頭のこと、にいら島の支配者の
- 10 あろう天太御前ん 前に出ての意、
- 10 びぐ^{むしる}筵、しきゆとり びぐ筵は「びーぐ」を編ん作った筵のこと、
- 11 ばたやばら、敷きとり 「ばだ」は肌のこと「やばら」は柔らかいの意、
- 11 びぐ^{たみ}畳うえぐん その畳の上に
- 12 ばたやばら^{うえ}ぐん
- 12 手足^{てびき}ぶり、うがみば 手も足も折って、畳にひれ伏して拝んだら
- 13 びたびたと^{うが}拝みば
- 13 なうやりが、与那覇^よゆ 「なうやりが」「いきややりが」は対句で、どうし
- 14 いきややりが豊見親ゆ たのか、何のためにかの意、

- 14 うわばだぬまびぬ 童ぬ お前のような子供の身で、
うが美しゃぬ、あてなぬ そんなに美しい若者が
- 15 にいら島下り来すか この後生島に下りてきたのは何のためかとお訪ねに
あらう島下り来すか なった。
- 16 まことからうみうき 「まくとから、まびらから」は同意で、真実のこと、
まびらから、うみうき ありのままの事を申し上げます。
- 17 宮古ぬ始りんゆ (宮古の始まり大昔に)
島ぬ新立つんゆ
- 18 とゆんしゆが、にゃーんには (豊見親という名高い者が居なかった)
名といしゆがにゃーんには
- 19 じゃらばん、とゆみみ (それでは私が豊見親になろうと思い)
じゃらばん名取りみ
- 20 いでとゆみ、うたすが (出世して豊見親になることができたが)
いで名取りうたすが
- 21 あがはたつばだんゆ 「あが二十歳ばだ」は私の二十歳頃、「うぶすぐり
うぶすぐりばなんゆ ばな」は初めてて名高くなった頃の意、
- 22 しゃなんすが、うぶさん (憎む者が多くなり)
憎むしゆがたいさん
- 23 しゃなんすん、しゃなまり (憎む者のために害せられて)
憎むすん、にくまり
- 24 にいら島、うり来すゆ (後生の島にやって来ました)
あろう島下りきすゆ
- 25 にいら天太がなすや これを聞いて後生大王は
あろう大帳ゆ その後生の大きな帳簿を調べられたら
- 26 下うから起しば 昔から現在までの事を取り調べたら、
終りがみ、しゃばきば しゃばきは捌く事、調べる事、
- 27 胸ぬかぎ者やり 「胸のかぎ、肝のかぎ」は心のやさしい良い人間で
肝ぬかぎ者やり あったの意、
- 28 ゆぬ宮古、帰りゆ 「ゆぬ」は同じの意、同じ宮古へ
ゆぬしゃんか戻りゆ 同じ娑婆に帰れと仰せになった
- 29 ぷからしゃど、あいすが 「ぷからしゃ、いしやうしゃ」は同じ意味の言葉
いしやうしゃどあいすが 誇らしやの意で、喜ばしく思いませうの意、

- 30 目口がーりからや
うむら^{がー}変りからや 「目口がーり、うむらがーり」は同意で、一端死んで姿、形がすっかり変わる事
- 31 ゆぬ宮古かいらん
ゆぬしゃんか^{むと}らん こんなに変わってしまったからは、同じ宮古に再び戻ることは出来ませんの意、
- 32 あんやちか、与那覇ゆ
うりやちか豊見親ゆ 「あんやちか、うりやちか」は同意、
それでしたらの意、
- 33 にいら^{うぐん?}大道んゆ
あろう大道んゆ 後生島の大道にの意、
- 34 青網^{あうづな}ゆばいばいら
ま^ま芋網ゆばいばいら 青網は茅の網、ま芋網は麻の網、後生大道に網をはい渡そうの意、
- 35 うりたどり^{かい}帰りよ
糸^{いと}たどり帰りゆ その網をたよりにして
現世に戻りなさい
- 36 島行かば与那覇ゆ
国行かば豊見親ゆ もう一度娑婆に蘇生したら与那覇よ
- 37 人間ぬなれやゆ
ゆかいしゃんあんだら
きばんしゃんあんだら 人間社会の常として
貧富貴賤いろいろあろうが
- 38 ゆかいがゆうえんな
きばんしゃゆみうすな 富貴であればある程、
貧困なものを可愛がることを忘れるな
- 39 にいら天太みうかぎん
あろう天太みうぶきん 「みうかぎ」「みうぶき」は同意で御蔭様で、又は御助けによつての意、
- 40 糸たどり戻りば
網たどり戻りば 網をたどつて再び此の世に戻つて来られた
- 41 まばずみぬ、ぬんでや
新^{あら}ばなぬ、すでいいや 「ぬんでい」「すでいい」は同意で生まれる、更生する意
- 42 宮古^{みやこ}ぬ^{とら}ぬ^は方んゆ
島ぬわーらんゆ 宮古島の東方にある白川浜という所に出での意、
- 43 白浜^いん出うちゆり
かぎ浜^いん出うちゆり 白川浜という美しい浜に出での意、
- 44 白浜^いんなかん
かぎ浜^いんなかん 白川浜のまんなかの意、

- 45 んなぐ船ばぎうちゆい 「んなぐ船、しなぐ船」は同意で、砂で船の型を
しなぐ船ばぎうちゆい 造ったの意、
- 46 んなぐ船んなかん その砂で造った船のまんなかの意、
しなぐ船んなかん 「にんた起き」は眠たり起きたりしながらの意、
にんた起きしゆうちゆい
- 47 寅ぬ方ゆ見いりば 寅の方即ち東を見ているとの意、
あがるなゆ、みーりば
- 48 ゆしやすみやきんたて ベガサス星座の四つ星、「ゆしやす」は屋敷のこと、
うりがあとからや 「きんたて」は四隅の柱を立てて家建てをすること
- 49 んみ星ば上がらし その後からは、「んみ星」はスバル星群のこと、「ん
うりがあとからや み」は群れの意、
- 50 むい星ば上がらし 「むい星」は馭車座星群のこと、「むい」は箕のこと
うりがあとらや
- 51 たきゆみや上がらし 「たきゆみや」星は不明
うりがあとからや [おおくま座] (『村誌たらま島』)
- 52 うぷらくーら、上がらし 明けの明星のこと
うりがあとからや
- 53 うふてだゆ上がらし お日様が上がってきた
- 54 にいらてだ、うかぎん にいら大王の御蔭様での意、
あらう天太みうぶぎん
- 55 島たていばならいゆ 「島たてい、ふん立て」は宮古島を立派に立て直し
ふん立ていばならいゆ た、後世の人々はこれを見習えの意、

このニーリについては、まずは歌詞(節)の若干の整理が必要かと思われる。『日本民謡大観(沖縄奄美)宮古諸島篇』(『日本放送協会』以下『民謡大観』)は、同じくこのニーリを多良間島で採録し、「むいかぐしいゆなば」の表題で掲載している。この中で、上記の37節、46節、48節については、「対句項の一方が伝承の過程で脱落したものと思われる。」と指摘し、次のように表記している。

※〔 〕の節は民謡大観、「民謡大観」は57節までとする。

37節 人間ぬ なれやゆ/ゆかいしゃん あんだら/きばんしゃん あんだら
〔37節〕 にんぎんぬ なれやよ/〔歌詞脱落〕

- [38 節] ゆかる° しゃん あんたら／きばんしゃん あんたら
 46 節 んなぐ船 んなかん／しなぐ船 んなかん／にんた起き しょうちゆい
 [47 節] んなぐふに んなかん／しなぐふに んなかん
 [48 節] にんたうき しーちゆいよ／〔 歌詞脱落 〕
 48 節 ゆしやすみや きんたてい／うりが あとからや
 [50 節] ゆーしゃしいみゃーや きたていー /〔 歌詞脱落 〕
 [51 節] うりが あとうからやよ／んにぶしば あがらし

以下、「民謡大観」では、<52 節 うりが あとうからやよ／むいぶしば あがらし、
 ~55 節 うる° が あとうからやよ／うぶていば あがらし>まで、「史歌集解」の表記
 と違い、「うりが あとからや」が各節の前に置かれる。対句項の一方の脱落ということであ
 れば、歌詞の調子からみてもそうであるように思われる。

これに習えば、同じく 25 節の「にいら天太 がなすや／あろう 大帳ゆ」も、「にいら天
 太 がなすや／〔 〕」と、「〔 〕／あろう 大帳ゆ」の複節（二節）だったものが伝
 承の過程で〔 〕のそれぞれの対句項が脱落し一節となったことが考えられる。これを二節
 とみて、各節に共通する対句の対応関係を考えて、仮りに例示すれば、「にいら天太 がなす
 や／〔あろう天太 がなすや〕」、「〔にいら 大帳ゆ〕／あろう 大帳ゆ」などの同義として
 使われる言葉だったことが考えられる。

3 ニーリの「むいか越」は果たして地名なのか

「与那覇勢頭豊見親のニーリ」は「むいか越与那覇よ 与那覇しど豊見親よ」と歌い出さ
 れる。これについて稲村は、『むいか越』は地名で平良市東仲宗根にある『むいか井』とい
 う洞窟井の附近をいうのである。豊見親は此处で生まれたので『むいか越与那覇』と称せら
 れた」（「史歌集解」）と言って、このニーリによって与那覇勢頭豊見親が「当時平良の東川根
 盛川越に拠って全島に威を振った与那覇原の出身であることが明らかとなった」（「庶民史」）
 と述べている。

ニーリの冒頭で歌い出される「むいか越与那覇よ 与那覇しど豊見親よ」の「むいか越」
 が地名であることは自明のことであって、何ら疑う余地のないものとされている。しかし
 ニーリの「むいか越」は果たして地名なのだろうか、気にかかるものがあってこのことから
 まず考えてみたいと思う。

ニーリは全篇が一節ごとに対句で構成されていて一定の形式に準拠している。その一節ご
 との対句は同じ言葉（もしくは同義の言葉）で反復されている。このことから「むいか越」

が地名なのであれば、その対句となる「与那覇しど豊見親よ」の「与那覇しど」をどう解せばよいものなのか、つまりニーリの歌詞が一定の形式を準拠しているのであれば、一節ごとの対句は上の句、下の句ほぼ同義のものとして歌われているはずで、「むいか越」が地名だとして、それに対応する「与那覇しど」もそうになっていると言えるものなのか、このことについて稲村は『よなはしど豊見親』という名称は与那覇原の頭の意味である。」と言って、「むいか越」が与那覇原（一族の名称であり、また地名でもあるとする）の根拠地だとする説によって対句の対応関係を説明しているようにも思えるが、いまひとつ判然としない。

2 宮古^{みやこ}ぬ始まりんよ／島^{しま}ぬ新立^{あらたた}んゆ [宮古の始まりに 島の立始めによ]

3 とゆむしゆが にゃーんにば／名^なといしゆが にゃーんにば

<「とゆむしゆ」「なといしゆ」は対句で名高いすぐれた人の意、「にゃーん」は無いという意（「史歌集解」）>

42 宮古^{みやこ}ぬ黄^{わう}ぬ方^{ほう}んゆ／島^{しま}ぬわーらんゆ [宮古の東方に 島の上によ]

43 白^い浜^{ひら}ん出^いうちゆり／かぎ浜^{かぎひら}ん出^いうちゆり [白い浜に出て 美しい浜に出てよ]

ニーリの対句は地名であれば同じく地名で、もしくは同義の言葉で反復されて歌われる。このことから言えることは、「むいか越」が地名なのであれば、その対句となる下の句も同じく地名かまたは同義の言葉となって、たとえばニーリ冒頭のうたい出しは「むいか越与那覇よ／東仲宗根（あがす° そね）ぬ豊見親よ」とか、あるいは「むいか越与那覇よ／東川根（あがす° かーに）ぬ豊見親よ」などとなって、なんらかの地名をもって歌われるはずだということなのであろう。しかしニーリの対句がそうはなっていないことをみれば、「むいか越」を地名だとする先の稲村の説は、あるいは単に稲村の思いこみによってなされた地名説であったかも知れないということも考えられて、ニーリの「むいか越」は果たして地名なのか、このことはニーリの全体をみていく中で改めて考えてみる必要があるように思われる。

<「むいか越」は「大洋を越す（航海する）」意か>

ニーリは「むいか越与那覇よ／与那覇しど豊見親よ」と歌い出される。「むいか越」が地名でないとするならば、この歌い出しの歌詞はなにを意味するものなのだろうか、大洋を航海する与那覇勢頭豊見親がいて、その与那覇勢頭豊見親にあるなにものかが呼びかけている、私にはそのような言葉のように思われる。しかしてその呼びかけるあるなにものかとは、それはほかならぬ与那覇勢頭豊見親を甦生させてもとの宮古（現世）に送り帰した神である「にいら天太 あろう天太」であった。そのように理解したい。このニーリにはにいら天太が与

那覇勢頭豊見親に「何々^と与那覇よ、何々^と豊見親よ」と呼びかける（語りかける）場面がこの外に三度みられる。

- 13 なうやりが、与那覇^{かなば}ゆ [どうしたのか与那覇]
いきややりが豊見親ゆ [なにゆえか豊見親よ]
32 あんやちか、与那覇よ [それならば与那覇]
うりやちか豊見親よ [そうであれば豊見親よ]
36 島行かば与那覇ゆ [島に帰ったら与那覇]
国行かば豊見親ゆ [国に帰ったら豊見親よ]

ニ一り冒頭に歌い出される、「むいか越与那覇よ／与那覇しど豊見親よ」も、これら一連の歌詞同様にいら天太が明らかに豊見親に呼びかけている、そうしたものとして見ることができる。豊見親を甦生させて島づくり、国づくりの法を教え現世に送り帰したにいら天太の呼びかけ（語りかけ）であれば、それはむいか越の地にいる（そこで生まれた）与那覇へではなく、今、まさに新たな島づくり、国づくりに向かって航海する与那覇勢頭豊見親への呼びかけなのであろうと思う、そう考えればこの歌詞はニ一り冒頭の歌い出しとしても実にふさわしいものに思われる。

航海する与那覇勢頭豊見親、「むいか越」の「むいか」が「盛川（泉）」で、盛り上がって流れる川の意から転じて「大渡（うぶど）・大洋」の意と解されるのであれば、「越（くす）」はまさにその大洋を越し渡り航海することであり、「与那覇しど」はその航海する船を操る人（勢頭・船頭）で、「むいか越与那覇よ／与那覇勢頭豊見親よ」は、「大洋を越し渡る（航海する）与那覇よ／（その航海する船を操る船頭である名高い）与那覇勢頭豊見親よ」の意となる。すなわち「むいか越」が航海を意味するのであれば、対句としても上の句、下の句同義となって、このニ一りの歌われる一定の形式に準拠し、いずれも「大洋を航海する与那覇勢頭豊見親よ」の意となる。「与那覇」という呼称もまた海（船・航海）と深くかかわって由来される名称なのであった。（このことについてはあらためて述べることにする。）このニ一りは与那覇勢頭豊見親が、今、まさに大洋を越し渡って中山朝貢のために航海している。その与那覇勢頭豊見親に「にいら天太 あろう天太」が「むいか越与那覇よ／与那覇勢頭豊見親よ」と呼びかけている。そのような言葉として読みとることができるように思われる、地名の「むいか越」から与那覇勢頭を解き放ち大洋に赴かせたい思いがする。

しかし、このように理解するについては、きわめて大きな難点が付きまとうこともまた指摘しておかなければならない、「むいか越」の「むいか」は「盛川（泉）」で、盛り上がって流れる川の意から転じて「大度（うぶど）・大洋」の意と解されるのであれば、と先に述べた。しかしそのような用例を今は見出すことはできない、あるいはそのような用例はないのかも知れない、そうした用例が見い出せないことであれば、このような考え方はきわめて恣意的で、あまりにも飛躍がありすぎるといってその一言に尽きるものであろうか、あるいはそうかも知れない。しかし、そうではあっても、「むいか越」は果たして地名で自明のことなのか、今いえることは、この二ーリの対句形式から考えて下の句の「与那覇しど豊見親よ」の「与那覇しど」が地名を意味しないのであれば、上の句の「むいか越豊見親よ」の「むいか越」もまた地名ではないはずだ、そう考えられるということにとどめ置く、今はそういうことなのかも知れない。

< 「むいか（盛川）」・「くす（越）」 >

ムイガーは城辺仲原の東海岸に流れ出る湧水で、名とする「ムイガー」は地下水が湧き出して盛り上がる状態で流れ出るカー（盛川・ムイガー）に由来すると見ることはできるように思われる。（しかし一方では地名の箕の隅<ムイヌスン>、箕島<ムイズマ>などとかかわる「ムイガー」であるようにも思われる）

平良東仲宗根のムイカガー（盛加川）もやはり「ムイガー（盛川）」で洞窟の奥深くから湧出し、盛り上がって地下へと流れる川（洞窟川）からの名といえよう。「盛加越」の地名はこのムイガーに由来する。

𦵑^{ひん}だき^{つかき}のタービ（狩俣）（『南島歌謡大成 Ⅲ宮古篇』）

- | | | |
|-----|-----------|-------------------|
| 114 | おーぎみジどうんむ | きれいな水殿が |
| | くるぎみジどうんむ | 清水殿が |
| 115 | うシか むやがりど | それほどに盛りあがって（湧きでて） |
| | あだか むやがりど | あれほどに盛りあがって（湧いて） |

「越（くす・くい）」に限って言えば、これは大海原を越え渡る用例として普通に見い出すことができる。

眞^{まや}屋^{ぬやぬ}の家^{やぬ}の四^よ島^{しまぬしゅ}主（池間島）（『南島歌謡大成 Ⅲ宮古篇』）

- | | | |
|----|--------------|----------------|
| 15 | なう ふしやど | 何を欲しがって |
| | あうシや くいみやゆいが | 大海原を越えてみえられたのか |

- 16 すむむとうん 下八重山に
 ぷかシヤ くいんみヤイがよ 深い海を越えてみえられたのか
- 19 かりうしヤゆ 嘉例吉船を
 むむシだき ふしヤんどうよー たくさん欲しいので
- 20 うじゃーやいま こんな遠い八重山に
 あうシヤ くいばやちゆりゆ 大海原を越え渡って私はきているのだ

まつさびがあやご (池間島) (「史歌集解」)

- 22 山からぬ水ぬど 山からの水は
 山ならし走りうりば 山を打ち鳴らしして流れているので
- 23 大水ぬ越さるん 大水が越えられない
 走る水ぬ越さるん 走る水が越えられない
- 35 吾がぬ一り、見ちから、 私が (船に) 乗ってみると
 真白美ぬ一いだき 真白美に乗るようだ
- 36 うぶ渡いで走らしばどう 大海に出て走らせれば、
 渡中いであらしばどう 渡中に出て走らせれば
- 37 真白美がいらまん、 真白美がほんとに
 くば地から、歩つに如ん 陸地から歩いているようだ

＜「真白美(まつさび)」は与那覇勢頭豊見親が守護神と祭祀する廣瀬御嶽の祭神で、八重山のおもと岳の神に連れ去られて、そのおもと岳で「大水・走る水」が越えられずにそこで死んで、うぶ木(大きな木)に化生する。与那覇勢頭豊見親はそのうぶ木で造られた船に乗ってまつさびが越せなかった「大水・走る水」(うぶ渡・大海)を越し渡り航海する。＞、なんの拠りどころもなくこのようなことを思ってみたりする。

「まつさびのあやご」が、まつさびの「死と再生(化生)」をいうものであれば、「与那覇勢頭豊見親のニーリ」これもまた、与那覇勢頭豊見親の「死と再生(甦生)」をいうものであった。このことがなにを意味するものなのか、その何らかのかかわり合いがあつてふたつながら伝承されているものなのかも知れない。

4 与那覇勢頭豊見親の死と再生(甦生)

- 21 あが二十歳ばだんゆ 「あが二十歳ばだ」は私の二十歳頃、「うぶすぐり
 うぶすぐりばなんゆ ばな」は初めてて名高くなった頃の意、

- 22 しゃなんすが、うぶさん (憎む者が多くなり)
憎むしゅがたいさん
- 23 しゃなんすん、しゃなまり (憎む者のために害せられて)
憎むすん、にくまり
- 39 にいら天太みうかぎん 「みうかぎ」「みうぶき」は同意で御蔭様で、又は
あろう天太みうぶきん 御助けによつての意、
- 40 糸たどり戻りば 綱をたどつて再び此の世に戻つて来られた
綱たどり帰りば
- 41 まばずみぬ、ぬんでや 「ぬんでい」「すでいい」は同意で生まれる、更生す
新ばなぬ、すでいいや する意
※<新ばなぬ、すでいいや> すでる(孵化する)新しく生まれ変わる。
甦生(生まれ変わる事、生き返ること)

<孵で水> 沖縄の若水は別名「孵で水」ともいわれ孵で変わる水であり若返りの水として特別に意識されている。・・・単に生まれる、というよりは、蛇や鳥の雛などが卵から孵化するように、新しく生まれ変わる、という意味を持つ(外間守善『沖縄の言葉と歴史』)

目黒盛と与那覇原の戦いが与那覇勢頭豊見親の二十歳頃にあつて、豊見親はこの戦いで一旦死んで、後生のにいら島に下りて閻魔大王の前に行かれたが、大王のお情けに依つて甦生し生きがえつた。(「史歌集解」)このことについて砂川明芳は先にも記したように、豊見親の死は与那覇原の一員として目黒盛と戦つたことに因るものではなく、「むしろ(ニーリは)身近な競争相手によつて殺されたことを叙述している」ものだと論じ、豊見親の与那覇原一族説を否定する。

「民謡大観」に池間島の船漕ぎ歌、「狩俣の女童(かりまたのみやーらび)」が採録されている。この歌は「与那覇勢頭豊見親」を歌つたもので、多良間島の「盛加越与那覇」と「旋律も歌詞の内容も同系の歌である」という。

その歌詞の中に次の一節がみえる。

- 15 とうゆんでいーや にやーにばヨ 鳴響む手(者)がないので
なーがいいびーや にやーにばヨ 名揚がり部(者)がないので
- 16 ゆなはがいでい とうゆみみよー 与那覇が出て鳴響んでみよう
〔欠〕

- 17 かんじやいいでい ちいみやどうヨー 神座に出た故に
 [欠]
- 18 どうしいぬ やなむぬぬヨー 友達の悪い奴が
 しいとうぬ きしいちいらぬヨー 友人のきしいちいら (未詳) が
- 19 にーらじゃーんかい うらしば ニーラ座 (庭) へ下ろしたので
 ありうじゃーんかい うらしば アラウ座へ下ろしたので

この歌では、「与那覇勢頭豊見親のニーリ」が「猜む者、妬む者に憎まれて (憎む者のために陥れられて) にいら島、ありう島へ下ろされた」とするのにな代わって「友達の悪い奴が、友人のきしいちいら (切れ者か?) が、ニーラ座、アラウ座へ下ろした」となっている、このことは砂川明芳が指摘するようにまさしく「身近な競争相手」によって陥れられたことを視させるものがある。私は、稲村賢敷の「与那覇せど豊見親については後生戻りの人であったとする伝説がある、それはこの歌から来たものと思われる」(「史歌集解」という語釈、また、この「狩俣の女童」の歌詞や、砂川明芳が「身近な競争相手」によるものだと指摘することなどを思い合わせて、『古事記』(712年)の大国主命の国づくり神話(八十神<大国主命の兄弟神>の迫害による受難<死と復活>、スサノオノ命の治める根の国訪問<試練の克服>、新たな霊威を得て現世に帰っての国づくり)をどうしても想起しないではおれない。

<新たな霊威を得ての島づくり>

- 54 にいらてだ、うかぎん にいら大王の御蔭様での意、
 ありう天太みうぶぎん
- 55 島たていばならいゆ 「島たてい、ふん立て」は宮古島を立派に立て直し
 ふん立ていばならいゆ た、後世の人々はこれを見習えの意、

ニーリは与那覇勢頭豊見親に起った歴史的事実、(稲村が洪武年間の初頃<1370年代>とする目黒盛と与那覇原の戦い、その戦いによる与那覇勢頭の死<瀕死の重傷>)を語るものとみるよりも、与那覇勢頭豊見親が大国主命の国づくり神話にみられるごとく、死と再生というひとつの祭祀儀礼を経て、にいら天太から新たな霊威を得て孵で変わり(新しく生まれ変わって)島の統治者となって国づくり「島たてい ふん立てい」をする、そのことを語るものであって、そのために乗り越えなければならない試練があった。友達からの迫害、あるいは猜む者たちの陥れ、このことも大国主命がその兄弟神から受ける迫害(死)のごとくであって、そのことがまさに与那覇勢頭豊見親の死と再生(甦生)であり、与那覇勢頭が属す

る一族（あるいは集団）間に何らかの確執、対立関係があつて、与那覇勢頭豊見親がそうした試練を克服することで一族（集団）を統率し、島の頭となって主権を確立していく、そうしたことを意味するものであつたことが考えられる。

＜『古事記』のイザナギ・イザナミの国づくり神話に接近する神話伝承として知られるのが漲水御嶽の古意角・姑依玉二神による島づくりの創世神話であり、また同じく漲水御嶽の蛇婿入り神婚説話は『古事記』の三輪山説話とまったく共通する伝承として早くから知られている。加えて、後生戻りの人であつたとする伝説がある与那覇勢頭豊見親の、その一りに、『古事記』の大国主命の国づくり神話に接近する要素がみられることといい、あるいはまた「まつさびがあやご」にみられる「死と化生」、このこともまた『古事記』の五穀の起原を伝える説話（オオゲツヒメが死してその身から種々の穀物が化生する）、その説話の要素をくむ伝承ともみられるものであつて、こうした古事記神話が宮古島に色濃く伝承されている、このことは、あるいはこうした古事記神話を保持する何らかの集団があつて、その人たちが宮古の創世期に渡来し定着して宮古に根ざす独自の歴史・文化を形成していった、そうしたことを物語る、その痕跡をとどめているものなのかも知れない。＞

先の池間島で伝えられる「かりまたのみやーらび」の歌は、「狩俣のみやらびが、ていだ（太陽）の子を孕み身ごもつて、生まれた子に、与那覇と名を付けた　とうゆうみやと名を付けた」と歌い出される。

＜狩俣のみやらび、磯原の美人が生まれて、うらやましがられていたが、神の道に捕えられて、ていだ（太陽）の道に捕えられて、神のために孕んだ、ていだのために身ごもつた、孕んでいる子は、身ごもつたがに（黄金）子は、生まれたら、生まれ出たからには、何んと名を付けようか、何んといつて呼ぼうか、ゆなはと名を付けよう、とうゆうみやと名を付けよう、とうゆうみや名を付けて、与那覇名を付けて、宮古の新立て、島（村）の始まりに、鳴響む者がいなかったの、名を揚げる者がいなかったの、与那覇が出て鳴響んでいたが、ともだちの悪い奴、友人のきしいちいら（切れ者）に、ニーラ座、アラウ座へ下ろされた＞

日光感精によって娘が神（ていだ）の子を孕み、その生まれた子が島（村）立ての英雄となる神話的伝承が、与那覇勢頭豊見親の出自由来として伝えられている。

「白川氏家譜」は、「元祖与那覇勢頭豊見親恵源、童名真佐久、生卒伝わらず、あるいは曰

く、天人の子なりと、然れども世遠くして、その実否詳らかならず」と述べている。このことも、いうように島立て、ふん（国）立ての英雄である与那覇勢頭豊見親を天人、神（ていだ）の申し子とする神話的な説話伝承が確かに伝えられていたであろうことを物語るものと思われる。

5 与那覇勢頭豊見親はいつから「与那覇勢頭」と称されたのか

一体、与那覇勢頭豊見親はいつから与那覇勢頭と称されたのだろうか、中山朝貢以後か、その以前からなのか、このことについて「史伝」は「明の洪武二十年（1387年）、即ち廣瀬御嶽に祈願して諸神祇を祈り、白川浜に船を装ひて方物を積み、邑人等と共に寅の方指して出帆した（中略）察度王は事情を聞きその忠誠を嘉し、数多くの引き出物を与えて宮古島の主長に任じた。彼は身に余る光榮に浴し錦を着て帰った。これで真佐久は、目黒盛豊見親の施政内に割り込んで来て、一方の勢力を得た、島民はこれを与那覇勢頭豊見親と尊んだ。」と述べて、中山朝貢以後のこととしている。

「庶民史」も「沖縄地方では『せど』は頭目（かしら）の意義を有し、船頭の意から転じて海外への使者等に称せられた。（中略）与那覇勢頭豊見親の場合は「せど」と発音して中山朝貢の使者として称せられたものであるとみるべきである。」と述べて、中山朝貢以後のこととするが、一方ではまた「目黒盛戦争の当時、二十歳に達し、すでに与那覇勢頭豊見親という英名を称していた」ともいっている。これは「与那覇勢頭豊見親のニーリ」が目黒盛戦争のことを歌ったものとする、そのことからの矛盾であるように思われる。

与那覇勢頭豊見親については「史伝」、「庶民史」ともに目黒盛との戦いで一敗地に塗れた佐多大人率いる与那覇原軍の一族で、「真佐久という一少年」、「二十歳の若武者」だとする、その真佐久（与那覇勢頭）が逃れて「白川浜の付近（与那浜）」に身をかくし、後に一族の再興をはかるために中山朝貢を成しとげたと説く所であり、目黒盛との一戦に敗れ去るまでは与那覇原軍の一員として宮古各地で攻略を行っていた、とする立場であり、このために与那覇勢頭が中山朝貢以前にあって与那覇勢頭（船頭・海上航海者）と称されることはなかったということなのであろう。

私には与那覇勢頭豊見親は、中山朝貢以前からやはり航海にかかわって与那覇勢頭と称されたものように思われる。そしてそれは目黒盛との戦で一敗地に塗れた与那覇原（真佐久<与那覇勢頭>もその戦いの中にいたとする）、その与那覇原とは別の与那覇勢頭であったように思われる。

与那覇勢頭豊見親は洪武二十三年（1390年）に白川浜から船出して初めて中山朝貢の道を

開いた。このことを『御嶽由来記』（1705年）は「廣瀬御嶽、女神真志らへと唱う」の由来で次のように伝えている。「昔神代に、右の神（真志らへ）が巖しき女に変じ、時々廣瀬の山に顕れていたのを与那覇勢頭という人が拝み祀っていた。この人は恵み深い人で、当所（宮古島）は小島で万端不自由している。いかにもして大国（琉球国）に通融せんと思ひ、二三丈〔約六～七メートル〕の竹に五色の糸をつり上げ、その影に座して大国の方を教え給えと諸星を拝んでいると、その夜の明け方に、その糸は皆北に打ちなびき、寅の方角に島影が見えたので、歡喜の思いで船を仕立て、廣瀬の嶽に立願して、悪鬼納加那志に昇り、始めて拝謁したる由云々」

「御嶽由来記」は、中山朝貢する以前にあつて「廣瀬御嶽の神を、与那覇勢頭という人が拝み祀っていた」といって、中山朝貢以前から与那覇勢頭と称されていたようにもとれる記述となっている。「御嶽由来記」は1705年の編さんで、中山朝貢の1390年から315年後の記録であることを考えれば、これがそのまま当時の人々の意識を伝えるものとはならないにしても、ひとつの意識状況を推し量るものとしてみることはできるようなも思うが、どうであろうか。

与那覇勢頭豊見親が中山朝貢に至った動機を伝える「記事仕次」も、「与那覇勢頭豊見親当地（宮古島）の酋長たりし時、民俗奸險にして善に向かわず、常に兵を好み人命を殺害す」と記述し、中山朝貢以前にあつて、与那覇勢頭豊見親は宮古島の酋長となっていた、それで人々から与那覇勢頭豊見親と称されていたというふうにもみることができる。

また「白川氏家譜」は、その「家譜序」に「麻古山〔宮古島〕は中山に通交する以前は、民俗常に暴邪に馳せり、強は弱を凌ぎ弱は強に諂い、奸邪暴戻為さざるは無く、このために人民は塗炭の苦しみを極めていた。与那覇勢頭豊見親は所の土民（島民）に推戴されて島の主長となつて、心力を尽くして島民を教導したが、如何せん習俗は深く染みついて改まることはなかつた。」といつて、このために民俗を憂えた与那覇勢頭豊見親は、その頑愚な習俗を改めさせるために、自ら進んで琉球中山国へ朝貢し帰順しようと沙壇を白川浜に築き祈願したと記述する。この「家譜序」の記録もまた、与那覇勢頭豊見親は中山朝貢以前に、土民（島民）から推されて島の主長となつていた、それで島民たちから与那覇勢頭豊見親と称された、とみることもできる記述となっている。

与那覇勢頭豊見親の中山朝貢を伝える、先の「記事仕次」は「もとより（宮古島と）八重山島とは唇齒の好あり、故に洪武二十三年庚午彼の島の酋長を導いて、相共に方物を捧げて中山に朝見す云々」とも記録している。唇齒（くちびると齒）の好あり<互いに密接な関係にあること>、察度王から褒賞を賜わり錦を着て帰った豊見親は直ちに八重山に渡り、その

島の酋長を導いて、相共に方物を捧げて中山に上がった。これは与那覇勢頭豊見親が中山朝貢以前から八重山と好を通じてたびたび渡り（つまり船で航海して）、八重山の酋長と密接な関係を築いていたから出来たことなのであろう。そうであれば、その頃からすでに与那覇勢頭と称されていたであろうことが考えられる。

与那覇勢頭豊見親逗留旧跡碑（1767年、与那覇勢頭豊見親の後裔、平良親雲上恵治の第五子恵若によって泊村に建立された石碑）に「時領八重山同来朝覲」の文字が刻されている。島尻勝太郎はこれを「時に八重山を領し^{とも}同^{とも}に來り朝覲す」と訓読している。（『與那覇勢頭豊見親逗留旧跡碑復元記念誌』1989年）、「領し」は、「かしらし」で、率領（かしらし・ひきいて）の意であれば、「彼の島の酋長を導いて云々」とあるのは与那覇勢頭豊見親がその配下の八重山の酋長を領し（かしらし・導いて）共に中山に朝覲したとみることもできるように思われる。

『雍正旧記』（1727年）の「比屋地御嶽、男神あからともかねと唱う」に、「右由来は、昔神代に、久米島より御神兄弟渡海にて、弟神は比屋地の神となり、兄神は八重山島おもと嶽の神となりたる由候御縁を以て、八重山、宮古前代より通融致したる由候事」とあって、宮古、八重山の近縁を説いている。これは鍛冶神の渡来を説くものとされていて、与那覇勢頭豊見親について直接云うものではないが、宮古、八重山は神々の御縁によって前代から人々も通い合っているということである。その中心的な人物として与那覇勢頭豊見親が中山朝貢以前からかかわっていたであろうことが考えられる。

6 「与那覇勢頭」は倭寇由来の名称か

与那覇勢頭豊見親が与那覇原の一族で佐多大人の子だとする稲村の説に同意するものではないが、与那覇原は倭寇の一味だとする説については、与那覇勢頭豊見親もまた、その「与那覇」といい、「勢頭」といい、船と航海にかかわって倭寇である（あるいはあった）ことの何者かを思わせるものがある。

与那覇勢頭豊見親（ユナパシドトゥユミヤ）、与那覇勢頭の「勢頭」は「船頭」の意とされる。勢頭<せど・シド>=瀬戸<せと/狭い海峡>（せまい海峡をたくみに船を操って航海する操船に長けた人、転じて船頭・勢頭）、

伊良部下地島の通り池は津波伝説を伝える「ヨナタマ」で知られている、漁師に釣り上げられ炭火にあぶられて津波を起こす「ヨナタマ」、その「ヨナタマ」は海霊を意味すると云われている。稲村は「ヨナ（ユナ）」について、「友利、砂川付近では海のことを『よな』というのだと古老は語った。海に漁獵に行くことを『よなうり』といい『よな下り道』『よな下り川』等という言葉がある。海岸地方の部落名に与那覇、与那浜、与那越、よなんだき等の地

名があるが、皆海に縁のある地名である。(中略) 柳田国男先生は『よなたま』は海霊の意味で称されていると教えられた。」(『庶民史』)と述べている。

与那覇の「与那」は「海(うみ・よな)」で、これに「覇」が合わさって「与那覇」となり、「与那覇勢頭」、「与那覇ばら」などの人名や集団名となって、また後では地名ともなったことが考えられる。倭寇の異称を「ばはん(八幡)」と呼ぶとされる。「八幡(ばはん)和寇の異称『和漢三才絵図』によれば、和寇がその船に立てた旗に『八幡』の神号を記したのを、明人がバハンとよんだからという。」(『広辞苑』)、「覇」は、その倭寇を意味する「バハン」由来が考えられる。「覇」(八幡・バハン→バン→パ→ハ<覇>)。

「与那覇」(海のバハン・ユナヌバハン→ユナバン→ユナパ→ヨナハ<与那覇>)。

与那覇勢頭豊見親には、その祭神とする「まつさび(真志らへ)」(八重山のおもと岳の神に連れさられ、そのおもと岳で死んで船材に化生し船霊となる「山のマツサビ/まつさびがアヤゴ」が伝えられている)をはじめ、そのまつさびを祀る廣瀬御嶽の名称「廣瀬(ビッシ・ピシ・干瀬)」もそうだし、与那覇勢頭といい、その由来が全て海(船)にかかわるものとなった。廣瀬御嶽には「まつさび」の外に「まざのぼう」「やびじ主」「ふじぬ主」などの祭神が祀られているが、このいずれも海にかかわる神名となっている。

中山朝貢の船出にあたり豊見親は白川浜に沙檀を築いて祭場をつくり、「んなぐ船 しなぐ船(砂の船)」を象つて、その中で寝起きして七昼夜祈願した、童名とする「真佐久(まさく)」も、あるいはまた、その「んなぐ・しなぐ」の(んなご<まなご・まさご>)にかかるものなのかも知れない。

与那覇勢頭豊見親<海霊に守護された海の覇者である名高い人>

与那覇勢頭豊見親にはその人物(名称)や船と航海にかかわって倭寇である(あるいはあった)ことのなにものかを思わせるものがある。しかし私は、その名称からは、倭寇、いわゆる海賊集団として掠奪行為をする倭寇、そうしたのではなく、<海霊に守護された海の覇者である名高い人>このよう意味合いの言葉を思いうかべている。与那覇勢頭豊見親は、あるいは倭寇ではなく(倭寇はまた貿易集団でもあったわけだが)、「勢頭」つまり船を操る航海者であって、中山朝貢以前から宮古八重山を行き来し(八重山は造船のための船材を得る要地であったと考えられる)、また遠く中国や南方方面とも交易を行い、島に「方物(富)」をもたらす者であったということであれば、あるいは島民が畏敬の念をもって倭寇の異称である「ばはん」をして与那覇勢頭豊見親を称え尊称していたものなのかも知れない、与那覇の「覇」が「ばはん」に由来するのであれば、まさに海の覇者である「ばはん(八幡)」の「は」が与那覇の「覇」となって、また新たな海の覇者に通じる意味合いを持つことになった、このようなことも考えられるように思われる。

今帰仁城（ぐすく）に拠った山北王統の最後の王「攀安知（はんあんち 1383～1416）」にも倭寇の出自説があるとされる。「攀安知」→「八幡按司」（ばはん→はん<攀>）

「攀安知の『攀』は中国語では p a n と読むが、孫薇氏のご教授によればこれは b a f a n からの転化と解することができるという。b a f a n は『八幡』の明代の中国語よみである。（「安知」＝「按司」、つまり『八幡按司』ということである。」（『琉球王国と倭寇』吉成直樹・福寛美著）

天人（ていだ）の子と伝えられる与那覇勢頭豊見親は、宮古にあって、あるいはその攀安知のごとき人物であったのかも知れない、「白川氏家譜」は、「与那覇勢頭豊見親は所の土民に推戴されて本島（一島）の主長となって、心力を尽くして島民を教導し云々」と記録している。「記事仕次」は「与那覇勢頭豊見親当地の酋長たりし時云々」で、この「酋長」からは、土民の長（土民のなかの有力なる人物）を思い描くが、「所の土民に推戴されて本島の主長」となったとする記述からは、あるいは与那覇勢頭豊見親は元からの島の土民ではなく、後からやって来た渡来人であって、それがやがて土民の信望を得るなかで、所（島）の土民に推戴されて主長に押し上げられた、とみることもできるように思われる。その渡来した与那覇勢頭豊見親は一人であったはずはなく船で海外を自由に航海する倭寇（あるいは交易集団）、その一団を率いる「勢頭」としての与那覇勢頭豊見親であったのであろう、

白川浜から中山朝貢に船出する与那覇勢頭豊見親は、このときにあたって「即ち工人に命じて、白川浜において貢船を修造し、方物を装載して、廣瀬御嶽を祈拜」して中山に向かった、と「白川氏家譜」は記している。貢船を修造する「工人」たちの存在、この工人とはおそらく与那覇勢頭豊見親が率いた船乗り集団で、中山朝貢以前からその配下にあつて海外を航海し、島に「方物」を運び入れた者たちだったのであろう。その「工人」たちを率いて与那覇勢頭は渡来したであろうことが考えられる。

7 「与那覇ばら」を考える

「与那覇しど豊見親」は、慶世村や稲村が言うように佐多大人を頭とする「与那覇ばら」の一族だったのだろうか、「与那覇しど」、「与那覇ばら」その名称からみて、やはり、そのなんらかの関係性は否定できないものだろうと思われる。しかし「与那覇はら軍（いふさ）」を伝える「記事仕次」はその関係についてなんら述べることはない。それどころか「与那覇はら」は目黒盛との一戦で敗れ、佐多大人は残兵とともに逃げ落ちたが、やがて「一夜の内に悪党共暴死したり云々」と記して、佐多大人を頭とする「与那覇はら」一族はその佐多大人とともに滅び去ったのだ云っている。つまり旧記の記録からは、「与那覇はら」に結びつくよ

うなもの、その関係性はまったく視われないということである。

思うに慶世村や稲村は、その名称である「与那覇しど」、「与那覇はら」の「与那覇」があつて、その同一名であることが無視できないことから一族説をとつたと云うことだろうか、私には、同じく倭寇にかかわるものであつたとしても、そこには様々の集団があつたのであろうから、なおそのことで一族とは思われないものがある。「与那覇しど」は「天人・ていだの子」として国づくりをし島民を教導するもので、「与那覇ばら」は「積悪の宿業ある悪党共」の集団だと旧記類は伝えている。

「与那覇ばら」の「与那覇」は、「与那覇しど」の「与那覇」と、やはり同様でその由来が先のとおりであつたとすれば、「ばら」はどう見ることができるのであろうか。

＜ここに平良より東に与那覇はらとて一間切あり、そのぬしは作多おひとと云う者なり、この郡に兵十行あり、一津らとは百人をいふ＞

「与那覇はらとて一間切りあり」、この間切(村)について「史伝」は、「仲宗根の東方程近い所に(東川根の附近一帯の地といふ)与那覇原という村があつた、とし、「庶民史」は「平良の東部に与那覇原と称する強大なる一族があつた。彼等は盛加川を中心として住み、その西は与那覇原と称し、東は川根原と称し、ほぼ現在の東川根附近である。」としている。

「史伝」「庶民史」ともに与那覇原は東川根附近にあつた村(部落)だと言っている。この東川根の与那覇原説に対して砂川明芳は、これでは覇権をかけて対峙する与那覇原と目黒盛の根拠地(平良東仲宗根の根間外間一帯の地)が隣接し、あまりにも近すぎるといって疑問視し、与那覇原の根拠地とされる「平良より東の一間切、郡」は城方の中原箕の隅一帯の地が考えられるとする。(「郷土史考」第1部)

「与那覇はら」、慶世村、稲村、砂川の3氏は、これをともに「与那覇原」と表記し、与那覇原村のことだとする。しかしその「与那覇はら」の「はら」は、「原」と同義で、そのまま「間切」や「郡」「村」などの集落や地名を意味するものなのだろうか。「記事仕次」は、「目黒盛豊見親与那覇はらと軍の事」、「高腰の按司与那覇はら軍に不ろふされし事」の記事中、目録表題も含めて「与那覇はら」の「はら」は全てひらがなの「はら」表記で、漢字の「原」で表記する例はないように思われる。

○「目黒盛豊見親与那覇はらと軍の事」

平良より東に与那覇はらとて一間切あり

与那覇はらの兵共に過半不ろふされたり

与那覇はらにも是を察して手を動かさず

与那覇はらの悪党共いよいよ恥じ恐れて後悔す

○「高腰の按司与那覇はら軍に不ろふされし事」

むかし与那覇はら軍の時分高腰の按司とて威勢の人あり

与那覇はらの者共時ならず襲ひかかるといえとも

与那覇はらのもの共胆を寒し

与那覇はらも終に攻め不ろふさんと恐れをなす

与那覇はらの狼藉を鎮めんと

与那覇はらの者共大きにおとろき

我か与那覇はらを討ち取りて後は

与那覇はらと与ミしけるこそおたてけり

与那覇はらと相図をさため

与那覇はらの軍なめりとて

与那覇はらのもの共と約束のごとく

内立ての按司も幾程なく与那覇はらの者共に不ろふされしとなり

「一間切」、「この郡」とも一回きりの使用で、後はすべて「与那覇はら云々」で表記されている。「与那覇はら」は平良より東にある「一間切」であり「郡」だというのが、その実態はまったく見えてこない。その「与那覇はら」の「はら」は「原」ではなく、前述のとおり一か所の「はら」表記を含めすべて平仮名の「はら」表記となっている。これで果たして「原」すなわち「村（間切）」を意味することばと同義となるものなのか、「記事仕次」の表記は「与那覇はら」の「はら」は「原」とは同義ではないと言っているように思われる。むしろ「はら」は明らかに「原」と区別するためのひらがな表記であると思われる。漢字の「原」表記の場合、「記事仕次」は地名（村や土地）をいうときに使っている。逆に言えば地名（村や土地）をいう場合、平仮名の「はら」では表記しないということなのであろう。

○「目黒盛豊見親与那覇はらと軍の事」

豊見親の勢過半原へ出て、城内勢い少なきをはかり

豊見親か兵共近き原に出たる者共は平良に軍ありと見てければ

「高腰の按司与那覇はら軍に不ろふされし事」の中には「原」の記述は見られない、「記事仕次」の中にはこの「与那覇はら軍」以外にも地名や村・畑などを漢字の「原」で表記する記述が散見される。

西銘間切の西隣に石原といふむらありけり

石原郡おのつから西銘郡の有となるへしと

これさらもいは野原村の者なりけり

石原城の思千代按司父子にたはかられ

代川大殿は・・・壮年の頃おもはずと伯牛の病を得て代川原に莊園を構え隠居し
不なこい・・・原へ出る時はおふねの親の事をあやこに作りてうたいありく

「与那覇はら」の「はら」は地名（村や土地）を意味することばではないように思われる。私には、「与那覇はら」の「はら」は、与那覇はら集団を指しての複数を表わす「輩（ばら）」と読める。

＜与那覇はらの悪党共いよいよ恥恐れて後悔す、志かれ共積悪の宿業逃れさるにや、或夜大勢の攻め入るに夥しい物音して一夜の内に悪党共暴死したりと云々＞

「与那覇はらの悪党共・・・悪党共暴死したりと云々」、徒党集団の末路をみるような表記で、「はら」からは「ばら（輩）」、徒輩、悪党輩（ばら）、与那覇輩（ばら）などが見えて、「与那覇輩（ばら）の悪党共」と読めてくる。

「記事仕次」の「高腰の按司与那覇はら軍に不ろふされし事」の記述には、この「与那覇はら」の「はら」表記の外に、あとひとつ「城（ぐすく）はら」の「はら」表記がみられる。

＜中にも城（ぐすく）はら中喜屋泊村の内立大按司ハカの高腰の按司の肘紘とたのむ者（たのみとするもの）なり＞

これを「与那覇はら（輩）」に対する「城はら」表記とみれば「高腰の按司は諸方の首長に交を結び、時々兵器を集め時をうかがい与那覇はらの狼藉を鎮めんと思案をめぐらし云々」とあることから、「城はら」の「はら」もおなじく地名（村や土地）を意味するものではなく、高腰按司を盟主として内立按司ら城諸方の勢力が同盟を結んで、「与那覇はら」に対抗する複数の集合体を指しての「城はら（輩）」だったことが考えられる。

これらのことを考え合わせれば「与那覇はら」は、先に「与那覇勢頭」を倭寇由来の名称とみたように「八幡（ばはん）」と異称された倭寇を、宮古側が「与那覇ばら」と呼んだもので、「与那覇・輩（ユナパ・バラ）」で即ち倭寇集団を指しての呼称だったことが考えられる。

「兵共驍勇にして至極無道なり」（「記事仕次」）と怖れられた「与那覇はら軍（いふさ）」は、やはり稲村が云うように「倭寇の一味」であったように思われる、与那覇はらのぬしの「佐多大人（サータウプント）」の名は、その倭寇集団である「与那覇輩（ばら）」を「沙汰する（指しずする）人（頭目）」を意味しての名称だったのかも知れない。「平良より東に与那覇はらとて一間切あり」とする、その「与那覇はら」の「はら」が特定の区域（間切・村）＜即ち与那覇はらの根拠地＞をいっていないのであれば、倭寇集団である「与那覇輩（ばら）」

が外から島を侵し、「平良より東」を拠点としながら、その主の佐多大人のもとで集団移動して島内各地を攻略した（あるいは一時占領した）、「一間切・郡」とは、その倭寇集団が跋扈し攻略した（あるいは一時占領した）そうした地域を指しての「一間切・郡」だったことが考えられる。

8 白川浜と与那覇勢頭豊見親の勢力圏

「与那覇はら」と「与那覇しど」ともに、あるいは倭寇にかかわる人物であり、集団であった。しかしその「与那覇はら」と「与那覇しど」との関係は一族ではなく、まったく別の人物であり、集団であったと思われる、このことを述べてきた。

思うに「記事仕次」が「その頃（与那覇はら軍の頃）は兵を好んで戦伐やむ時なし、若戦ひ負る時は其村を焼払い男女一人も残さず屠殺」する世俗だといひ、また「与那覇勢頭豊見親当地の酋長たりし時、民俗奸險にして善に向かわず、常に兵を好み人命を殺害す」世とも記して、「白川氏家譜」も与那覇勢頭豊見親が、所の土民に推戴されて島の主長となった当時「民俗常に暴邪に馳せり、強は弱を凌ぎ弱は強に諂い、奸邪暴戾為さざるはなく、人民已に塗炭の極み」だったとする、そのことは同時代のことを伝えるもので、どちらも「記事仕次」云うところの「与那覇はら軍」（いわゆる倭寇集団）が島内各地で跋扈し、人民を殺害し苦しめたことを言うものなのだろうか（そうした中で与那覇勢頭豊見親は、所の土民に推戴されて島の主長〈酋長〉となった。）そうであれば、ここではまた一族ではなかったにしても、元は倭寇で、その同一集団に属して何らかの関係があったとみることは、あるいはまた十分に考えられることのように思われる。

同一の集団から袂を分かった与那覇勢頭豊見親はやがて土民に推戴されて島の主長なり、国づくりをし、人民を教導する人となる。はたして、その過程の中で引き起ったであろう集団間における何らかの確執、このことについては「4 与那覇勢頭豊見親の死と再生（甦生）」で述べたことなので、ここでは触れないことにする。

「与那覇勢頭豊見親のニーリ」や「白川氏家譜」は白川浜からの船出・朝貢を語り伝えている。その中山朝貢に船出するにあたり、与那覇勢頭豊見親は祭神とする廣瀬御嶽に立願して船出する。廣瀬御嶽は白川浜から西に続く真謝のピンフ嶺に立地する。廣瀬御嶽の祭神は「まっさび」で、その「まっさび」は八重山のおもと岳とも結びついて、船と航海に深くかわる神とされている。これらのことから島の北海岸、与那覇間から白川浜、真謝のピンフ嶺、この北海岸一帯には与那覇勢頭豊見親が中山朝貢するかなり以前から、豊見親の有力な勢力圏が形成されていたであろうことを考えさせられる。

白川浜を中心とするこの勢力圏は、与那覇原軍（いふさ）に敗れた後で、そこへ落ちのびて形成されたとみるよりも、その以前から（あるいはそのこととは全く別に）与那覇勢頭が宮古島と海外を結ぶ航海の要地として開き、その拠点地として形成されていたものと考えられる。

廣瀬御嶽で祭祀される「まっさび」、その「まっさび」にかかわる歌謡が「まっさびがアヤゴ」「山のマッサビ」「池の大按司鳴響み親のアグ」などとして歌われて、池間島や狩俣などで伝えられている。「まっさびの山（八重山のおもと岳）ごもり、死と再生（木<船材>への化生）、大工を寄せ集めて船造り、美しい船の出現、進水と航海」などを内容とするこの歌謡は、いうまでもなく与那覇勢頭豊見親とも密接にかかわるものであった。こうした歌謡が豊見親が祭祀する廣瀬御嶽の祭神「まっさび」にかかわって宮古の北部地域で伝承されている。このこともまた与那覇勢頭が戦いに敗れて落ちのびたとするよりも、早くからこの北部一帯で根をはって一族の勢力圏としていたから歌われたものだと考えられる。

また、先にもあげた、これも池間島で船漕ぎ歌として伝わる「かりまたのみゃーらび」、この歌は多良間島に伝わる「むいかぐすゆなば」の類歌で、「与那覇勢頭豊見親」を歌ったもので、「ていだ神」の子を孕み、その生まれた子が英雄となる神話的伝承が与那覇勢頭豊見親の出自由来として伝えられている。このこともやはり、豊見親が早くからこの北部一帯の地で根をはって、一族の勢力圏を形成し、その地を拠点として中山朝貢を果たし、国づくりをなしたことで生まれた伝承なのであろう。

おわりに

白川浜一帯の地がそうしたことであったとすれば、「むいか越」は地名で、「与那覇勢頭豊見親」はその「むいか越」で生まれたから「むいか越与那覇」と称された、とする稲村の説に再び立ち帰って、あるいは果たしてどうなんだろうかとまた自問をくり返すことになる。その「むいか越」の「むいか（盛川）」は、盛り上がって流れる川で、転じて「大渡（うぶど）・大洋」の意となると述べた。きわめて恣意的な解釈であって、自身どうなんだろうという思いがしないでもない。

「むいか越」の「むいか」は、あるいはまた「天の川」の意となるようにも思われたことであった。中山朝貢を歌う「与那覇勢頭豊見親のニーリ」は東の天空にかかる星座を望みながら北に向って航海する、私にはそのように思われる。ゆしやすみや（ペガサス座の大四辺形）から、んみ星（スバル星群）、むい星（ぎょしゃ座）、たーきゆみや（おおくま座）、うぶらくーら（明けの明星）と次々に東の天空に現れる星座を仰ぎながら北に向かって一路航海

する。その中であって、むい（箕）星（ぎよしゃ座）は横たわる天の川に箕の形で大きく掛かって望まれる。豊見親を乗せた船はそのむい星の掛かる天の川をこえて中山へと向かう。そのようなことを思ってみた。むい星の掛かる天の川は「箕（むい）川・ムイカー？」（ムイガーは城辺中原の箕の隅くムイヌスン）の東海岸から流れ出る湧川、「ムイカー」つまり天の「盛川（ムイカー）」で、その「むい（箕）星」の掛かる「天の川」は天空に盛り上がり流れる川であった。豊見親はその「ムイカー」を越し渡って中山へと向かう。はたして「天の川」を宮古の方言ではなんというのだろうか、宮古郷土史研究会顧問の佐渡山正吉先生にご教示を願った。先生は「ティンヌウブンズウ（天の大きい溝）」だと明快に教えて下さった。私の考えたこととはまったく逆のことを意味する言葉であった。

その後にも知る機会があったので、これも言えば、池間でも「ティンヌフンジュ」でこれもやはり「天の大きい溝」であった。外に平良では「アマヌカー」、長浜では「アマヌカワ」で、天の川の直訳的な言い方もあるようだ、多良間では「ウプガー」で、これは天の「大きな川」で、いく分か天の「盛川（ムイカー）」に近い気分もするが、しかしそういうものではないだろうから今はその気分だけで留めおくことにする。

平良住屋御嶽の神は「根入りヤ下りあろうふむ^{まぬす}眞主」、その由来を（「史伝」）は次のように述べ伝えている。

根間の里に七歳になる子供が継母に育てられていた。継母は子供を憎み、ある日、住屋アブ（住屋洞）の端に生い茂るピイウ°（喰わず芋）の葉を摘みに行かせた、子供は葉を摘み取ろうとして、足を踏み外し底も知れない洞へ落ちてしまう。ところがはびこっていた蔓に足がからんでぶら下がり、七日七夜泣き通していたのを、その父がうるさく思い蔓を断ち切り、我が子を奈落の底へ落とし入れた。落ちた子供は底知れぬ洞を通り抜けて、地の下の根入りヤの国あろうの国に入っていった。根入りヤの神は子供から事の次第を聞いて、庭先に群がる七疋の赤牛を指して、お前は彼の牛を飼い馴らせ、お前が心根悪しからば突き殺されるであろう、心根善からば牛はよく馴れ親しむであろうと言われた。子供が赤牛の群れに近づいて行くと、牛どもは子供の周囲に集まって尾を振り、耳を垂れて迎え、子供の身を舐め清めてうれしがり、よく馴れ親しんだ。根入りヤの神は、子供があから世（現世）の^{まき}正しき心を持つものだと言って、子供を赤牛に守らせて、赤土の大鍋に油を一杯に入れ、八尋布^{やひろぬの}十尋布^{とひろぬの}を燈心とし、それに火をともして根入りヤの国から送り出した。現世に戻った子供は住屋山に入り、根入りヤ下りあろう踏む眞主と崇めまつられた。

子供は根入りヤの神から与えられた試練を克服することで、現世に戻され神となって崇められる。与那覇勢頭豊見親は、にいら天太からはとくにこのような試練を与えられていない、最初からなかったものなのか、あるいはまたこれも伝承の過程で抜け落ちたものなのか、もしあったのであれば、あるいはこのようなものであったのかも知れない。

「中山に到る。然れども言語通ぜず、・・・三年にして言語ようやく通ず。」（「記事仕次」、与那覇勢頭豊見親が始めて中山に朝貢した時、島民挙げて琉語に通ぜざる者が甚だ多かった、それで豊見親は伶俐な者二十名を択び琉語を学ばしめた。（「白川氏家譜」、この言語不通の問題については、本稿では特に触れることはなかったが、みてきたように与那覇勢頭豊見親とその率いたであろう一団を、倭寇にかかわるもの（あるいは倭寇ではなくてもなんらかの航海（交易）にかかわるもの）たちであって、日本（九州方面）から渡来し島に定着したものであったと考えれば、中山朝貢は島に定着してあまり日ならずに行われたもので、このために琉語が十分に通じなかったとみることもできるように思われる。このことについては与那覇勢頭豊見親が白川浜から船に「方物を装戴」して中山に朝貢する、このことで、王府が「是に由り中山始めて強し」（『中山世譜』）と記録することと合わせて、「与那覇勢頭豊見親の航海（交易）と方物（富）の集積」のような項題を考えたりしながら、本稿をまとめてきたのだがそこまで進めるに至らなかった、今はともかくこれで本稿を閉じることにする。

（しもじ としゆき）